

51年後のグスタフ

菅野 健

グスタフ君、君をこのように呼ぶことを許してくれたまえ。君に初めてヴェニスで会ってから、ふと数えてみたのだが、すでに51年も経っている。半世紀という、客観的に見れば、とてつもなく長い、と言わざるをえない歳月が、いつの間にか、こんなふうに流れ過ぎてしまっているということに、改めて驚いている。

一体君はどうしてしまったのだ。あんなふうにあっけなく、ヴェニスで命を落としてしまおうとは。君は、「50歳誕生日に公に与えられた貴族の称号」<sup>(1)</sup>を有する、功成り名遂げた立派な人間であった。そんな称賛と尊敬を受け続けた人物が、ヴェニスの海岸で、あまりにも無様に生涯を終えてしまおうとは。この問いは、半世紀を経た今でも、僕の中に渦巻き続けている。

初めて君に会った時、僕は、まだ20歳の若造であった。何も知らない青二才、と言われても仕方のない年齢であった。30歳も上の、貴族の称号を与えられた功績のある人物を理解できなくても、当然のことであった。

あの時の年齢に51歳を加え、君よりも20歳も上になった今の僕であれば、君を君と呼んでも許されるであろう。それでも、君のことがわかったとは言えないのが現実なのだ。

君はやはり、誰にとっても、謎の人物なのだろう。だから、多くの人々が、君の謎を探ろうとして、さまざまな試みをして来た。その最も有名なものは、ヴィスコンティの映画化であろう。そこで彼は、君を作曲家として描いた。君よりもわずかに前に死してしまっていた、作曲家グスタフ・マーラーを重ね合わせにした。相貌も、マーラーを思わせる。

そもそも、君の生みの親もまた、マーラーからグスタフという名前にしたと考えられる。しかし、ここは、あくまでも言葉の人でなければならぬのだ。ヴィスコンティの描いた作曲家が、友人と激しく口論する場面があるのだが、生みの親は書かなかったその場面で、奇妙に浮き上がってしまったのを感じるのは、僕だけではあるまい。それに、ヴィスコンティが描いた世界は、「少年愛の美学」<sup>(2)</sup>の色彩が強すぎる。

「美しきもの眼に見し人は／すでに死の手の囚われ人よ」<sup>(3)</sup>と書いた詩人の名は、君の生みの親の作品の中には、一切出て来ることはない。しかし、君の人生は、この通りになってしまった。実際君は、ヴェニスに着いて、この「憂鬱で熱狂的な詩人」<sup>(3)</sup>のことを思う。ヴェニスを愛したこの詩人とは、アウグスト・フォン・プラーテンで、「アンスバハの貴族」<sup>(4)</sup>と呼ばれる。

僕が実際に、ヴェニスを訪れることができたのは、君に初めて作品の中で出会ってから、10年も経ってからのことであった。ヴェニスは、本当に不思議な街であった。海の上に浮かんでいるようにしか見えないのだ。この不思議極まりない街に魅了されて来た、さまざまな人物たちのことを思った。君の姿をも、街の中に見つけ出そうとしてみた。しかし、僕の目に映るのは、観光客たちの楽しそうな、嬉しそうな、だから幸福そうな姿ばかりであった。ヴェニスにやって来た人々は、心身ともに高揚していた。

君がヴェニスを歩き回っていた時にも、幸福そうな観光客たちは、多くいたことであろう。しかし、その背後にあるものを、君の生みの親は、この作品の中に、どれほど描き込んでいることか。冒頭部、君が「ミュンヘンの自宅から、一人でかなり遠くまで散歩を試みた」のは、「数カ月にわたってヨーロッパに深刻な危機の様相を与えた一九……年春のとある一日の午後」<sup>6)</sup>なのだ。さりげなく描かれたこの時代背景の中で、すべてが起こっている。君は、このような時代の中で、すでに生きる気力を失っていたのか。だから、「美しきもの眼に見し人」として、「死の手の囚われ人」となったのか。それが時代の退廃であるならば、君の生みの親は、そこに批判の視線を投げ続け、危機の時代を生き抜いた。ここで君は滅びに至るが、君の生みの親は、その生き方を共感をもって描くことによって、まったく同時に、厳しく距離を取る。

共感と距離、これこそが、君の生みの親が君を描いた描き方なのだ。共感なしには、いかなる対象も描きえないのであろうが、それは、まったく同時に、その対象からの距離でもなければならぬ。共感の中に、共感それ自体が、峻厳なる距離になる視点が、おのずと含まれている。

ヴェルテルを滅ぼして、その生みの親は、そこから、苦難の時代を、どれほど強くたくましく、豊かに生き抜いたか。君を滅ぼして、君の生みの親は、その後の辛く厳しい時代を、やはり強くたくましく生き抜いた。

時代は常に、その時代その時代にとっての危機の中にある。今もまた、危機の時代の真只中だ。この時代を、僕たちはどう生き抜いて行くのか。

野田宇太郎文学散歩賞 氏名：菅野 健

タイトル： 51年後のグスタフ

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	注
①	②	①	②	①	
365	218	378	218	365	
頁	頁	頁	頁	頁	

元作品情報

① トーマス・マン著・高橋義孝訳「ヴェニスに死す」  
『トーマス・マン全集』(1971年 新潮社) 収載

② トーマス・マン著・宮原朗訳「アウグスト・フォン・プラーテン」  
『トーマス・マン全集』(1971年 新潮社) 収載